13　次は、建築家である筆者が二〇〇七年にドイツ・フランクフルトでピーナッツ型の茶室を建てるまでの検討の過程を記した文章の一部である。これを読んで、後の問いに答えよ。　　　　　　　　〈筑波大〉二〇二〇年度出題

　日本には国宝指定を受けている茶室は三つしかない。利休作の、織田有楽の作で現在は移築されて犬山城の中にある、もう一つは、京都紫野の臨済宗の名刹、大徳寺のである。

　四畳半を境にして、茶室は四畳半以下のと、四畳半以上の広間とに分類される。三つの国宝はどれも小間であり、極めつきの「小さな建築」であるが、平面図を詳細に見れば、どの茶室も客が茶を喫するメインの座敷に附属して、水屋と呼ばれるサービス空間が、ほぼ同じ大きさで用意されている。

　サービス側である主人は屋口から入って、次に道口を通って座敷に入り、炉の前に座る。サービスを受ける側の客り口から座敷に入って、そこで茶という液体を介して主人と対面する。二つの主体が、別々のところから別々の経路をたどり、最終的には一点で交差する、（１）この二重性こそ茶室空間の、他の空間にはない面白さである。

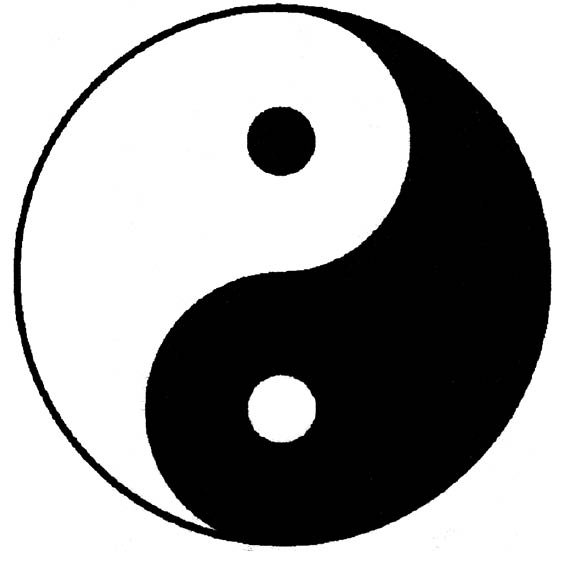
　利休は茶室をどんどん小さくしていった。しかし、どんなに座敷が小さくなっても、水屋と座敷という二重性が消滅することはない。そこに茶室という存在の秘密がある。どんなに「小さな建築」へと縮小しても、客と主人がたどる経路は別々のままで、統合されない。それゆえに「小さく」ても世界に通じている感じがある。

　ここに日本的な空間の秘密がひそんでいると、僕は感じる。主人の空間と使用人の空間というヒエラルキーが西欧の建築を支えていた。主人のための空間は建築の中心を占め、天井も高く、デザインの密度も高い。そのまわりを天井も低く、閉鎖的な使用人の空間が取り囲むという階層的な構成である。中心があって、周縁があるという序列が、それぞれの空間のスケール、デザイン、質にまで投影された。主人の空間が「大きい空間」であり、使用人の空間が「小さい空間」と定義づけられていたのである。建築に限らず、西欧では世界そのものに階層をつけ、「大きな空間」と「小さな空間」とに、ヒエラルキーをつけた。世界とは序列であり、大小であった。

　ところが（２）茶室には、その序列がない。客の空間とサービスするための空間は、主従、大小の関係にはない。そこにヒエラルキーはない。茶室ではしばしば、客のための空間はより狭く、より暗い。サービスのための水屋は、機能性を確保するため、そこまで暗くできない。ヒエラルキーは逆転し、序列は反転する。客と主人の空間は、道教が世界原理の説明に用いた陰陽のダイヤグラム（図）のごとく、お互いに攻めあい、えぐりあいながら、回転する。

　待庵の水屋に、興味深い空間がある。国宝の茶室三つを見ると、如庵と密庵の水屋は、湯こぼしのための竹のすのこがしつらえてあって、それなりに水屋の姿をしている。しかし、待庵は図面で探しても水屋らしきものがないし、竹すのこはどこにもない。図面上では「勝手」と名づけられた空間の隅に三段棚が竹でられ、この上の棚に水差し、下の棚に湯こぼしを置いて水屋として使われた。その棚の脇の柱は上で切られ、おそろしい緊張感をたたえる。利休にとって、水屋とは厨房でも準備スペースでもなく、茶をたてる空間に匹敵する重要性を持っていたと、僕はこの三段棚から推測する。

　茶室と水屋の関係は、近代建築がめざした均質空間ではなく、西欧の伝統的なヒエラルキーの構造も、そこにはない。二〇世紀の近代建築運動は、空間のヒエラルキーの排除をめざした。政治において、デモクラシーが唱えられ、権力のヒエラルキーが否定されたように、空間においても主空間、従空間というヒエラルキーが否定された。壁という境界のない、透明で連続な一室空間が追求された。この近代建築運動のリーダーの一人であったミース・ファン・デル・ローエは、ヒエラルキーを排除した空間をユニバーサル・スペースと呼び、住宅もオフィスも、ユニバーサル・スペースに近づけようと試みた。



【図】　陰陽のダイヤグラム

　しかし、一九七〇年代に反動がおきる。アメリカの建築家ルイス・カーンは、そもそも人間という存在は均質なユニバーサル・スペースの中で生きていくことはできないと主張した。空間には中心となるサービスを受ける主人の空間と、脇役のサービスする空間という序列がなければならないと、カーンは主張した。近代建築運動の大前提を否定したのである。

　一九七〇年代、ベトナム戦争の敗北で、二〇世紀アメリカ文明は大きな転機を迎えた。その新しい空気の中で、カーンは二〇世紀アメリカの「大きな建築」を批判したのである。カーンは「の下では人間は眠れない」と語った。水平にがる均質的な大空間を、カーンはこの一言で否定した。大きくて均一な空間に代わって、ヒエラルキーのある古典的空間へと、カーンは回帰したのである。

　カーンが行ったことは、一種のアメリカ批判であった。（３）ミースの唱えたユニバーサル・スペースは、二〇世紀のアメリカ流工業社会に、ぴったりとフィットした。工場でもオフィスでも住宅でも、二〇世紀アメリカでは水平に拡がる大空間が求められた。その大空間の中を、必要に応じて間仕切るというのが、工業化社会が求めた合理的効率空間だった。その水平に拡がる大空間を積層させていくことで、高密度の効率的都市を作るのが、二〇世紀流アメリカ文明の本質だった。そのようにして作られた、広く均質なフロアが、限りなく積層して「高層ビル」という「大きな建築」になった。この効率的な「大きな建築」を、二〇世紀アメリカは発明し、世界に広めたのである。

　貧しいエストニア移民の子供として生まれたカーンは、その生い立ちも、複雑な私生活においても、二〇世紀アメリカのアウトサイダーであった。一方、第二次世界大戦後のアメリカ建築界をリードしたのは、ドイツでスタートしたバウハウス運動のリーダーであったヴァルター・グロピウス率いる、ハーバード大学の建築学科である。ミース流のユニバーサル・スペースの「大きな建築」を、ハーバードのエリートが中心となって世界にひろめたのである。

　一方、カーンは、「アメリカの京都」と呼ぶべき古都フィラデルフィアのペンシルバニア大学で、フランス帰りのポール・クレから、エコール・デ・ボザール流の古典的な建築教育を受けた。エコール・デ・ボザールは、二〇世紀アメリカでは時代錯誤とされた、ギリシャ・ローマ風の古典的建築様式を教える、フランスの王立の建築学校だった。この古くさい伝統を受け継いだカーンが二〇世紀アメリカを批判した。カーンがきっかけとなって一九八〇年代、ポストモダニズムと呼ばれる伝統回帰運動が生まれた。

　確かに人間は梁の下には眠れない存在かもしれない。均質な空間の中には生きられない存在かもしれない。しかし、だからといってカーンの主張のように、再びギリシャ・ローマ流の古典に戻っていく必要もない。主従という序列に戻る必要はない。アメリカ人でもヨーロッパ人でもない僕は、そんなことを問い続けた。

　その疑問がくすぶり続けて悩んでいるときに、座敷と水屋とがからみあう回転型の構造が、突如として面白く見えはじめたのである。序列でも均質でもなく、回転し続けること、茶碗という小さな器の中の液体を軸として、主人と客という二つの主体が回転し続ける状態が面白いと思った。

　フランクフルトのくらむ茶室では、この回転の原理をつきつめて、ピーナッツ型の平面形状へと到達した。ピーナッツの殼の中に共存する二つの実のように、座敷と水屋とが対等に共存する。人はときに主人を演じ、あるときは客を演じる。役割を決定するのは、偶然であり、時間である。主人と客の二つの空間は微妙にくびれながらもつながっている。一体化しながら別物であり、対等でありながら異質である。回転の原理を導入することによって、さらにお互いの役割を転換させる「時間」というファクターを導入することによって、「小さい建築」が突如として、世界と結びつき、世界を巻き込んで回転を始める。

　日本人はただ小ささをもとめていたわけではなく、ただ世界を縮小していたわけではない。世界の中に回転軸を埋め込み、時間を通じて、自分と世界とをつなごうとしていたのである。時間を媒介として、「小さな建築」の中に世界をまるごと取りこもうとしたのである。

（隈研吾『小さな建築』による）

〈注〉　①　水屋口＝主人が水屋に入るための入り口。

②　茶道口＝主人が水屋から座敷に入るための入り口。

③　躙り口＝客が座敷に入るための入り口。

④　ふくらむ茶室＝筆者が考案した、樹脂製で必要に応じて空気を注入してふくらますことで設置できる、ピーナッツ型の茶室。

問１　傍線部分（１）「この二重性こそ茶室空間の、他の空間にはない面白さである」とあるが、筆者は茶室のどのような点を「二重性」としてとらえているか、述べよ。

問２　傍線部分（２）「茶室には、その序列がない」とあるが、「その序列」とはどのようなものか、述べよ。

問３　傍線部分（３）「ミースの唱えたユニバーサル・スペースは、二〇世紀のアメリカ流工業社会に、ぴったりとフィットした」とあるが、どのようなことか、説明せよ。

◎問４　筆者がピーナッツ型の茶室を建てた背後にある考えについて、この文章での検討の過程を踏まえて説明せよ。

【解答と採点基準】

問１　茶室という空間にはＡ客を迎えるメインの座敷の他に、Ｂ主人が使う水屋がＣほぼ同じ大きさで用意されており、Ｄ客と主人のそれぞれが、別々の入り口から別々の経路をたどり対面するという点。

Ａ・Ｂ・Ｄがなければ全体０。

Ａ＝２〔「客」「座敷」という要素は必須。〕

Ｂ＝２〔「主人」「水屋」という要素は必須。〕

Ｃ＝３〔（座敷と水屋が）「ほぼ同じ大きさ」という内容は必須。〕

Ｄ＝３〔「客と主人が別々の経路をたどる」という内容は必須。〕

問２　Ａ西欧にみられるような、Ｂ主人の大きく開放的な空間が建築の中心を占め、Ｃ使用人の小さく閉鎖的な空間がそれを取り囲むという Ｄ階層的な構造。

Ｂ・Ｃがなければ全体０。

Ａ＝２〔「西欧における」「西欧建築の」といった表現でも可。〕

Ｂ＝３〔「主人の空間」という内容は必須。「大きい」「開放的」「建築の中心」という要素がなければ、それぞれ減点１。〕

Ｃ＝３〔「使用人の空間」という内容は必須。「小さい」「閉鎖的」「主人の空間を取り囲む」（「周縁に存在する」でも可）という要素がなければ、それぞれ減点１。〕

Ｄ＝２〔「階層的」という要素は必須。〕

問３　ミースの提唱した近代建築は、Ａ西洋の伝統的ヒエラルキーを排した Ｂ境界のない均質な連続的空間を追求したものであったが、それは、Ｃ水平に拡がる大空間を必要に応じて間仕切る合理的で効率的な空間を、Ｄ積層して発展しようとする Ｅアメリカ流工業化社会が求めていたものであったということ。

Ｂ・Ｃ・Ｅがなければ全体０。

Ａ＝２〔「ヒエラルキーを排除した」という内容は必須。〕

Ｂ＝２〔「均質な」「連続的」（「境界のない」でも可）という要素がなければそれぞれ減点１。〕

Ｃ＝２〔「水平に拡がる大空間を必要に応じて間仕切る」という内容は必須。「合理的」あるいは「効率的」といった要素がなければ減点１。〕

Ｄ＝２〔「積層していく」という内容は必須。〕

Ｅ＝２〔「求めていたものであった」は、「合致した」「適合した」などの表現でも可。〕

問４　Ａ二〇世紀アメリカの均質な空間や、西洋の伝統的な序列ある空間に対して、筆者は違和感を抱いていた。そこで、Ｂ水屋と座敷とがからみあう日本の茶室に注目し、主人と客の二つの空間が持つ、Ｃ一体化しながら別物であり、対等でありながら異質であり、時間によって互いの役割が転換するという回転の原理を導入し、Ｄ時間を通じて、世界とつながろうと考えている。

Ａ＝２〔（従来の建築に対して）「違和感を抱いていた」という内容は必須。「均質な空間」「序列ある伝統的空間」という要素がなければ、それぞれ減点１。〕

Ｂ＝２〔「水屋と座敷」「主人と客」という要素がなければ、それぞれ減点１。〕

Ｃ＝３〔「回転の原理を導入する」という内容は必須。「一体化しながら別物」「対等でありながら異質」「互いの役割が転換する」という要素がなければ、それぞれ減点１。〕

Ｄ＝３〔「世界とつながる」という内容は必須。「時間を通じて」という内容がなければ減点１。〕